

志垣澄幸歌集

『雁喰』

(江南書房)

かつて雁がよく飛来していたという地に住む作者は1934年生まれ。「いぶし銀」とも言える独特の世界が詰まっている一冊だ。自身の老い、過ぎ去った時間、亡くなった人々への想いなど、どこか突き放したように淡々と詠まれていて、心に沁みる。

戦中、戦後を生き抜いた人ならではの戦争に関わる歌もある。決して激しい歌ではない。しかし、現在の不安定な世界情勢と相まって、平和の尊さ、戦争の怖さを考えさせられる。この歌集の核ともなっているようだ。

また、若い日には気にも留めなかった花々、長く睦んで来た樹々や山々、そして日向灘の風景など、自然への傾倒がある。それは年齢を重ねるとともに深くなるようだ。その一方、現代文明や人間の営みに対しての批評を対比させて独特の無常観を醸し出している。

夕つ陽が退きたる道にふとわれにかへつたやうな石ころが見ゆ

わが声を知る人徐々に減りゆかむいつしか風の声にならむか

日常生活の場面にはユーモアが含まれる。自分自身の存在を投影させるなど、その自在な発想が魅力的だ。二首目からは志垣さんの裡には悠久の時が流れているように感じられた。

(海老原光子)

大口玲子歌集

『スルスムコルダ 短歌日記2024』

(ふらんす堂)

〈ふらんす堂〉のホームページに連載されたものの書籍版。「スルスムコルダ」は、「心を高くあげよ」を意味するラテン語で、ミサで唱えられている文言とのこと。宮崎在住の作者は社会問題に果敢に立ち向かい、世の中の不条理に抵抗する姿勢を崩さない。

人間が人間を殺すこといかに見下ろしてきて木は紅葉する (九月九日)

戦争はまだ終はらず秋曇り新たななるこゑが戦争をよぶ (十月八日)

死刑廃止や反戦を訴える叙述の激しい歌がある一方、「助けて」と口開かむとしたるときみづからの声に目を覚ましたり (十一月十八日)

と、日々の活動に疲労困憊する自分を詠む。そのように奮闘する母の影響下、子息は家を離れ長崎のカトリック系の高校へ進学し、学園劇の公演で、作者が長年崇敬してきたコルベ神父の役を演じる。

身代はりの死を死なむとし前方へ一歩踏み出す息子の素足 (十一月二十二日)

ゆく春のギターの音に余白あり余白の中で子が手を振れり (三月二十六日)

余白無き日常に、子息の奏でるたどたどしい音色が温かい和みの光を添えている。

(久保田智栄子)